が生まれました。初孫です。私の子どもは、新しい命を育て始めています。世代から世代へ新しい命をつないでいき、時代が進んでいくわけです。ですから、子育てと介護という連鎖をきちんと進めていくことこそが、持続可能な社会を作っていくのではないでしょうか。今日は、「ケアが育む持続可能な社会」、というテーマでお話させていただきました。ご清聴、ありがとうございました。

「親を介護する息子たち」　平山　亮

平山：みなさん、こんにちは。東京都健康長寿医療センター研究所の平山と申します。今日は、親を介護する息子たち、というテーマでお話をさせていただきます。私は、もともと介護やケアの専門家ではなく、男の人の社会関係、人間関係の研究を専門としています。なぜ、そのような研究をやっているのかと言いますと、私自身、男の人と付き合うことがものすごく苦手だからです。小さいとき、公園デビューをしたときから、お友達は女の子しかいませんでした。ずっとそのような感じで来ておりますので、男の人が書いた人間関係に関する本を読んで、こうすれば会社のなかで男っぽく見えるのだな、こうすれば家庭のなかで父親あるいは夫として見えるのだな、ということがとても新鮮に思え、興味を持っています。

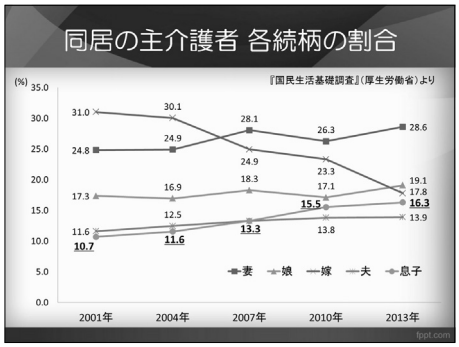
一方で、いろんな本や研究を見ていて、なぜ書かれていないのだろうと思ったことがありました。大人の男性の息子としての振る舞い方が、まったく書かれていないのです。親が老いたとき、娘やお嫁さんが出てくる研究はたくさんありますが、男の人はどのように振る舞うと息子として見えるのか、ということは不思議なぐらい書かれていません。男の人は、男として生まれた限り、息子であるはずなのです。夫として、父としてどうあるべきか、ということは語りますが、息子としてどうあるべきか、についてはあまり語りません。そのことにすごく興味を持ちまして、今では親が老いたときの息子介護の研究をしています。3 年前まではアメリカにいたのですが、2010 年から日本の息子介護のフィールドワークをやっています。

今回は、そのフィールドワークの成果の一部をもとに、息子介護という観点から、男性のケア労働について考えるための論点をいくつか提示させていただきたいと思います。天田先生のお話に被る部分もあるのですが、結婚している男性が親の介護者になっているケースです。ヘテロセクシャルの男性で、親の介護者になっている人です。先ほどから、すごく気になっていることがあるのですが、今回のシンポジウムは、ヘテロセクシャルに限っているのですか？限っていないですか。ヘテロセクシャルな男性を想定しているお話が多いなと思っていました。私は、ヘテロセクシャルに限定して、既婚の息子介護者に焦点を当ててお話させていただきます。

最初は、日本の家族介護における、息子介護の位置づけを全国調査のデータをもとにして紹介したあとに、今回はどうして既婚の息子介護者に焦点を当てるのか、シンポジウム

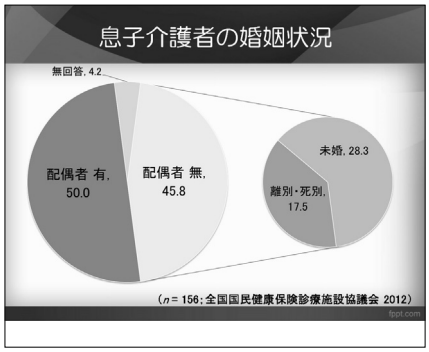
の趣旨に即してご説明させていただきます。次に、私自身のフィールドワークをもとにして、夫が息子介護者になっている場合の夫婦の関係はどのようになっているのか。いくつかのバリエーションと、バリエーションを超えて見られる特徴をご紹介します。最後に、全体を振り返って、既婚の男性がこれから息子介護者になっていくことで、家族のなかの性別分業、現在の夫婦の形にどのような影響がもたらされるのか、ということを考えてみたいと思います。

こちらのグラフは、厚生労働省が定期的に行っている、国民生活基礎調査をもとにして、介護保険制度ができた 2000 年以降の主たる介護者は、どのような続き柄の人がなっているか、その割合と時系列変化を示したものです。ここでオープンになっていたデータは同居介護の方だったので、それに限ったデータになります。



ご覧になって分かるように、2000 年代の初めには、お嫁さんが圧倒的多数を占めていました。ですが、その割合は減少傾向にあり、特に 2010 年から 2013 年は激減しています。逆に、息子介護はコンスタントに増えています。息子が主介護者のケースと、娘やお嫁さんが主介護者になるケースの割合の差が、かなり縮まっていることがおわかりになると思います。

どうして息子介護の割合が増えたのか。指摘されている理由の 1 つは、晩婚化や非婚化の影響で、親が要介護になった時点で独身の男性が増えているから、と考えられています。これには日本の雇用状況も関係しており、不安定な就労状況にある人が特に若い世代に増えています。独り立ちができなくて、独り立ちを先延ばしにしている男性も多く含まれています。介護の研究や介護の現場でも、息子の介護者に注意が向けられるときは、たいていの場合、独身の息子介護の方が多く語られているように思います。一般的には、息子介護は、独身の男性がなることが多いのではないか、というイメージが強いようです。実際、私が男性を相手に息子介護の話をするときも、他人事に思っている男性が多いように感じることが多いです。ただ、最近の調査を見てみると、そのイメージは必ずしも正しくないことがわかってきました。



国民生活基礎調査は、介護者のバックグラウンドについて、あまり突っ込んだ情報がないので、これは別のデータになってしまうのですが、いろんな介護者の中から、今回は息子介護のケースを引っ張ってきました。

この調査報告で分析の対象になっているのは全部で約 1,000 件の家族介護の事例でしたが、

その中の 160 くらいは息子介護でした。この割合は、国民生活基礎調査の続き柄の割合に似ていまして、16％ぐらいです。このうちの息子介護のデータを見ると、結婚している息子が主介護者になっているケースは、相当数あることがおわかりになると思います。私自身もフィールドワークを始めた当初は、独身の人が多いのではと思っていたのですが、実際にやってみると、半分くらいは結婚している人でした。そのようなことを踏まえ、今回は既婚の息子介護者に焦点を当てて考えていきたいと思います。なぜかと言いますと、既婚の息子介護者は少なくなくなっていて、独身の息子介護者とはまた別の形で今後も増えていく、と考えられるからです。

またもう 1 つの理由としては、家族の中の性別分業の今後を考える上で、夫が息子介護者になるケースが増えていくと、夫婦間のケア労働の分配状況はどうなるのだろうか、ということを考える意味があると思うからです。今日のシンポジウムの副題は、女性労働を支えるもう 1 つの観点ですが、家庭の外で女の人が働きやすくなるためには、最初の趣旨のご説明にもあった通り、家庭の中の仕事の男女間の配分や男性のケア労働への参加はどうすれば可能になるのか、これがすごく重要になってきます。多くの夫婦の間では、ケア労働の多くは女性の方が担っているわけですが、もし親の介護を、夫がやり始めたら夫婦の形はどうなっていくのか。これを考える上で、1 つだけ付け加えておきたいことがあります。

既婚の息子介護者が増えていると言われていますが、別に男性の側の意識が変わったからではない、という研究の方が残念なことに多くあります。例えば、家族社会学の中西泰子先生の「若者の介護意識」という、とても素晴らしい本がありますが、比較的若い世代の男性にも、奥さんがいないと親を介護する意向がでてこない、ということがわかっています。つまり、奥さんの関与とかサポートがある程度もらえるのではないか、と想定して初めて、男の人は親の介護のことを考え始める、ということです。どのような形であれ、奥さんに全部任せるのではなく、旦那さんが親の介護を自分でする夫婦は増えています。そこで、私自身のフィールドワークから、夫が息子介護者になっている例をいくつか見たあとで、夫婦間でのケア労働の分担は今後どのように変わっていくのか、ということを最後に考えてみたいと思います。

私のフィールドワークの方法ですが、ここは学会ではないので、詳細をお話ししませんが、報告の結論にかかわるところで、一点だけ押さえておいていただきたいことがあります。私のフィールドワークでは、息子さん自身が「私は親を看ています」というように自己申告をしたケースではなく、お医者さんやケア・マネージャーさんなど、ご家庭のことをある程度知っている人が、「あそこのお宅では、息子さんが主に観ているのですよ」と、紹介して下さったケースを息子介護のケースとしています。どうして第三者の定義を使ったかと言いますと、最初は自己申告ケースを使おうと思っていたのですが、問題が起こりました。みなさん、何となく分かりますか。「私は自分で看ています」と言ってくれた男性がたくさん出てきたのですが、失敗したことがありました。よく聞いてみると、実

質的に看ているのは奥さんだった、というケースがたくさん出てきてしまったのです。そのようなケースを今回は除きました。私が調べている息子介護のケースは、第３者から見て「息子が主介護者である」と言われたケースです。このことを押さえておいていただきたいと思います。

私がこれまでお会いした息子さんの半分ぐらいは結婚していらっしゃったのですが、夫婦の関係は必ずしもワンパターンではありません。いくつかのパターンがありました。その違いを表示させる軸はいくつかあるのですが、単純化させると少なくとも２つあります。

１つは、奥さんと親が同居しているかどうか。夫婦ではなく「奥さんが」とここで言ったのは、息子さんが親御さんの家にしばらく滞在している間、奥さんはご夫婦の家にいる、というケースもあり、必ずしも夫婦が同じところに居るとは限らないこともあるからです。あともう１つは、少し専門用語になりますが、親御さんの ADL のお世話に奥さんがどの程度関与しているかというものです。ADL というのは、ご飯を食べる、着替える、お風呂に入る、トイレに行く、という生活する上での基礎になる動作のことです。日本では、要介護状態であると見なされるとき、このうちの少なくとも１つが、１人では難しい状態にあります。この ADL の手助けは、家族の中で相対的に息子さんが最もしているから、息子介護と見なされていると思うのですが、この部分についても奥さんがどの程度関わってくれているか、という点でもバリエーションがありました。

すごくシンプルに分けると、少なくとも４通りに分けられています。奥さんの関与度が低いというのは、ADL の手助けがほとんどないか、極端な場合はまったくやってもらえない、というケースです。

①のパターンは、親御さんと同居していた息子さんが、自分の予期しない形で介護者になってしまった、というケースです。例えば息子さんは、割りと早いうちから夫婦で親の世話をするつもりで同居していたのですが、奥さんにとっては、必ずしも望ましい同居ではなかったというものです。しかし、旦那さんは「嫁と姑は、そこまでうまくいくものではないし」というように過小評価をして、そのまま同居を半ば無理矢理続けていました。そうすると、奥さんの方が心理的身体的に健康を崩し、親御さんの世話ができる状態ではなくなってしまうなど、他にも似たようなケースをいくつか見てきました。奥さんの健康状態が悪いわけではないのですが、自分の意志でリベンジを図ったといいますか、夫の親御さんが要介護状態になったとき、これまで抑圧されていたことを復讐する形で、一番ピンチのときに手を出さない。そのような形で、息子さんが介護者になったというケースがかなりありました。どちらの場合にしても、奥さんに関わってもらうことがほぼ不可能なのですが、お話を伺う限り、旦那さんはあまり納得していません。「本音ではもっと手伝ってほしい」、

「家族なのにまったく手を出さないのはどうなのか」と、おっしゃっている方が多くいました。やはり不本意なのだ、ということがよく分かりました。

②のパターンは、それとは対照的です。同居した当初の想定通り、夫婦で看ると決め、夫婦で看ることが可能になっている、奥さんの関与度が、かなり高いパターンです。ただ、一緒に住んでいることもあり、奥さんがほとんど共同主介護者といってよいくらい関わりが大きくなっているケースがありました。息子さんの説明から気付いたのですが、「夫婦でやっている」とか「うちで看ている」という言葉が多く出てきます。夫婦でやっていることが一緒くたにされて、夫婦がそれぞれにやっていることが区別できないような説明が多くあります。じっさいに細かく聞いてみると、じつは薬の管理は奥さんの方が多くやっていたこともありました。生活環境が一緒であることと、息子さんの方に夫婦で看ているという意識があるために、自分と奥さんがしていることがよく区別されていないのではないか、ということです。①と②のどちらのパターンに方になるかは、じつのところ奥さんにかかっています。息子の意思では決められません。同居した時点で、息子の方は奥さんがある程度関わってくれることを想定していたりするのですが、本当にその通りにはなるとは限りません。

ここからは、親と夫婦の家が分かれているケースです。③のパターンは家が分かれているが奥さんの関与やサポートが多いパターンです。②のパターンと③のパターンの息子さんはともに奥さんの関与やサポートが多いところで共通していて同居しているか否か違いがあるのですが、両方のパターンの話を聞いて、すごく違うと気付いたことがありました。③のパターンの息子さんは、奥さんがここの部分を担っていることを、かなり区別してお話することが多くあり、例えば、「何曜日の何時からは、奥さんに代わりに行ってもらっている」と言うことがありました。あとは、依頼のプロセスです。「こういうときには、妻に電話をかけて行ってもらうことにしています。」というように、一緒に住んでいないので、奥さんが介護に関わるためには、まずそこへ行ってもらう、というプロセスが必要です。自分が急遽行けなくなってしまったときには、奥さんに知らせないと、誰も見てくれない状態が発生してしまうからです。

この別居のパターンの息子さんは、「なぜ妻ではなく、自分が看る方がいいのか」という理由を話してくださる方も多くいました。理由としては、「自分の親は自分で看るべきだから」、「妻の親ではないのだから」、つまり血縁みたいなことです。あるいは、奥さんは、自分の親を看なければいけないだから、とてもやっていられないだろう、ということです。あとは、自分の親と奥さんとの関係があまりよくないから、ということを挙げている人もいました。ただ、そのようなことを言う一方で、自分の姉妹、既婚の姉や妹がどうして看なくていいのか、姉妹より息子である自分がどうして看る方がいいのか、について説明するときには、「姉は向こうの親の面倒を見なければいけないから」と、伝統的な嫁役割のような話を出すなど、一貫していないことがあります。ただ、自分の親ではないのだから妻は看なくていいのだ、という理由を、自分を納得させる説明として言えるくらい

には、やはり時代は変わってきていると感じました。

最後は、別居していて、奥さんのADLにかんする直接的な世話が、かなり少ないパターンです。1つ目と違い、奥さんが拒否をしたからではなく、息子さんの説明では、奥さんは、もう少し関わる必要があると思っているかもしれないけれど、東京と大阪のように親の家がかなり離れているから、息子さんがいいよと言っているようです。またもう1つは、女の人は、夫の親、つまり他人であってもどこかで世話をしなければいけないのかな、と思ってしまうので、そのようなスイッチが入ってしまわないように、息子の方が気を遣っている部分がありました。家に帰ったときに、介護のことを極力話さないようにする。あまり話してしまうと、奥さんの方が心配になって行かなければ、と思ってしまうかもしれない。そのような奥さんのスイッチを入れないように気をつけている、という息子さんもいました。ただ、奥さんが夫の親の方へ通っていないといっても非関与ではなく、先ほどの天田先生のお話にもあった通り、施設やサービスについて、自分の親戚や友達の介護経験者などの情報網を駆使して、情報という形でサポートをしているケースも多くありました。

既婚の息子介護者でも、どうして息子が介護するようになったのか、奥さんの関わりはどうなっているのか、ということはかなり多様性があります。一方で、そのような違いを超えて、かなり幅広く見られる共通の特徴がありました。

奥さんが、息子介護者である自分の旦那さんを含め、自分と同居している家族の生活にかかわる家事をほとんどやっている、ということです。例えば、旦那さんの食事や衣類の洗濯、息子介護者が生活をしていくために必要な家事は、奥さんが行っている。別居介護の場合は、旦那さんは親御さんの家に行って、そこで必要な家事や洗濯、掃除をするのですが、家に帰ってまで家事をするかといえば、必ずしもそうではありません。もう1つ、指摘しておきたいのは、①のパターンについてです。ADLの世話には、同居していて非関与の奥さんでも、夫の生活にかかわる家事については、ある程度やってくれています。それと関連しますが、奥さんは、息子介護者の親の生活にかかわる家事も、じつは相当程度、担っていることがわかりました。例えば、同居介護をしている場合、ご飯を食べさせてあげるのは息子さんですが、そのご飯を作るのは奥さん。親の着替えを手伝うのは息子さんですが、洗濯しているのは奥さん、という形です。別居の介護の場合でも、奥さんが作った食事を息子さんが自宅から親の家へ持っていく。洗濯物も息子さんが親の家から持ち帰って奥さんがやっている、というケースがありました。このような介護の形は、恐らく結婚している娘が自分の親御さんを介護するときには、なかなか行わないことではないかと思います。娘さんであれば、ご飯を作ることも洗濯することも、自分でやっていることがほとんどだからです。つまり、既婚の息子介護は、自分と親の生活にかかわる、いわゆる家事でイメージされるものと、親のADLの世話が分離されている珍しいケースである、といえると思います。

結論ですが、既婚の息子介護を通して、家族介護の形とか家庭のなかのケア労働の分配

が今後どうなってくるのか、いくつか見えてくることがあります。最初の定義のところで申しあげた通り、私が出会った息子介護者は、第三者が「これは息子介護者のケースである」といったケースです。そのなかには独身で、家事を含め何から何まで自分でやっている息子介護者も含まれていましたが、家事はやっていないが主にADLの世話をやっているので、これは息子介護であると、第三者の専門家が認めている人もいました。それを通して分かることは、少なくとも私たちの認識のなかに、親の主介護者は誰かを判定するときに、家事は必ずしも入っていないということです。もし家事が入っていれば、家事をまったくやっていな息子が、主介護者といわれることはなかったはずです。

最初に立てた問いに戻りましょう。もし既婚の息子介護者が、このままで増えていき、夫は夫で自分の親を看る、妻は妻で自分の親を看る、ということが増えれば、夫婦の間のケア労働の分配はどのようになるのか。歴史的にみれば、変わったと言えると思います。昔の夫婦のケア労働の分配・介護の分配と、今の夫婦のそれぞれが自分の親を看ているケースは違うからです。しかし、今の１つの夫婦を介護前と介護後で比べてみれば、どうでしょうか。夫の方は、自分の親が要介護になったのでケア労働が増えた、といえるかもしれませんが、妻の方はどうでしょう。残念ながら変わっていません。昔から、介護前も介護後も同じように家事をやっている、という状態は変わっていません。だから変化していないということが正しい。それどころか、同居している夫の親が要介護になったら、洗濯物は増えるかもしれないし、高齢者のための食事を特別に用意する手間が増えるかもしれません。負担が増えているかもしれません。

親の介護というケア労働の担い方が夫婦で変わったとしても、それ以外のケア労働の分配はまた別の話です。今は既婚の息子介護者を取り上げましたが、恐らく独身の息子介護者はまったく違うことになるでしょう。同じ親のケアをしながら働くといっても、結婚している旦那さんが自分の親を看ながら働くということと、娘さんの方が結婚して自分の親を看ながら働くということは、家事の問題を考えると全然違うことになるはずです。誰にとってどのようなケア労働なのか、どのような男性のケア労働なのか、というところを考えないと、ケア労働といって１つでまとめられない部分があります。そういうところも注意して、男性のケア労働を考えていく必要があるのではないか、ということが私の報告の結論です。以上です。ありがとうございました。

「家庭内の非対称性」　永井　暁子

永井：こんにちは、永井です。よろしくお願いいたします。女子大の人間社会学部の社会福祉学科におります。小学校１年生の息子を持つ母親でもあります。天田先生のお話は日常生活で重なるところが多く、コーディネートという立場を忘れて聞き入ってしまいました。

私は、家族社会学を研究しておりまして、最初に書いた修士論文は「共働き夫婦の家事